

海を渡ったサザンカ

箱田 直紀(前園芸文化研究所長)

1. はじめに

2007年の年末近くに中国の知人から浙江省技術出版社発行の『茶梅』という本を送ってきた。中国で「茶梅」というのは、日本では昔から庭木や生垣などに植えられている「サザンカ」のことである。最近になって中国ではこのサザンカが花の少ない冬季の彩りとして注目されて栽培が広がり、そのために単行本まで発行されたというのである。

その本は、浙江省杭州市の「花圃」という、いわば観賞用花卉の研究と普及業務を兼ねた機関に努めていた徐碧玉という女性研究者が中心になってまとめたものである。著書の中でもふれられているが、筆者もその研究推進の初期段階で少なからず関わったために多少感無量でもある。そこで、本稿では中国でのサザンカ利用の経過も含めながら、日本で生まれ育ったサザンカの花々が海外に渡り、世界の各地で利用されるようになった経過と現状についてまとめて報告する。

2. 日本の花・サザンカとは

サザンカが属するツバキ科のツバキ属植物は中国南部を中心に約250種が知られているが、分布圏の最東北端に位置する日本には4種が自生分布する(図1)。青森県以南の各地に自生するヤブツバキと日本海側の山岳地帯にあって、雪融け



とともに花を開くユキツバキは基本が春咲きの紅花種であるが、室町から江戸時代を経て極めて多数の園芸品種が生まれた。その多くが世界に渡って18世紀前半から現在に至る前後2回のツバキ栽培ブームを経て、現在では総数3,000にも達するほどの品種を抱えた重要な園芸植物になっている（ヒメサザンカについては本誌4号の表紙絵と表紙解説を参照）。

これに対してサザンカの自生地は本州では山口県の萩市のみで、四国西南部と九州から西表島までの西南地域に限られ、自生種の花は10月から12月にかけて咲き、白色である(図2)。しかし、自生が暖地であっても人が少し補助すれば関東地方北部あたりまでは十分に越冬させることができるので、江戸時代には江戸や西日本の各地で多くの園芸品種が生まれた。サザンカの自生種は白花であるのに園芸品種には桃色や紅色、白と紅のぼかし花などがあり、雄しべが花弁に変化した八重咲きなど花形変化も著しい。このサザンカの花色や花形変異が拡大したのは、江戸時代初期あるいはそれ以前に日本のどこかでサザンカとヤブツバキが自然交雑し、それがもとになって様々な雑種が生まれたためであると考えられている。

そのような発達経過を背景にして、現在ではサザンカの園芸種は主として花や樹の特性、開花期の違いなどから、自生のサザンカに近い①狭義のサザンカ群(図3)、サザンカに近いが花の八重化が進み、開花期もやや晩くなった②カンツバキ群(図4)、および、サザンカとヤブツバキの中間的な



図2 サザンカ自生種の花



図3 御美衣(サザンカ群品種)



図4 紋昭和の栄(カンツバキ群品種)



図5 笑顔(ハルサザンカ群品種)

特徴をもち、冬から春にかけて咲く③ハルサザンカ群(図5)の3群に大別される。したがって、開花期の異なる品種を組み合わせて植えると、秋から寒中を経て3月頃まで花を楽しむことができる。因みに、日本に現存するサザンカの園芸品種は、品種名が確認できるものだけでも300前後あるとされている。

3. ヨーロッパに渡った初期のサザンカ

ヤブツバキがヨーロッパに紹介されたのは1689年ということになっているので、サザンカはこれより少しおそく1712年にドイツ人Kaempferによってはじめて紹介された。Kaempferはオランダ東インド会社の医師として1690年から2年あまり日本に滞在し、帰国後出版した『Amoenitatum Exoticarum』(1712)の中で、「Sasanquaはツバキの類で、花が小さく一重で赤い」と述べているから自生種そのものではないが、ツバキの品種を列記した別のページでは、現在はハルサザンカに分類される“鎌倉絞”が含まれるなど、日本の初期の園芸品種に接したことがわかる。

サザンカはThunberg(1784)により学名を*Camellia Sasanqua*とされ、SieboldとZuccariniの『Flora Japonica』(1835)には3頁にわたる解説と詳細な図(図6)が載せられた。図中の右下に自生型の白花があるが、中央に大きく描かれた紅花サザンカは、サザンカとヤブツバキとの雑種第1代で、多くの園芸品種が作出される引き金となったと考えられているハルサザンカと思わ



図6 Sieboldのサザンカ図

れる。しかし、当時のヨーロッパにおける記録はいずれも長崎の出島を通じて日本に滞在した医師や博物学者によって著書の中で紹介されたものか、またはその引用であって、サザンカの生きた個体はまだ渡っていなかった。

ヤブツバキがヨーロッパへ渡ったのは1739年で、はじめは一重咲きの紅花であったが、18世紀末から19世紀初頭にかけて、はじめは中国から、ついで日本からも重弁花や斑入葉を含む多数の品種が入った。このころからイギリス、フラン

ス、ドイツ、ベルギー、および少しおくれてアメリカ合衆国において品種の収集や改良がはじまり、1820年から1850年代にかけてヨーロッパにおける最初のツバキブームがおこった。ツバキに関する単行本も相次いで出版され、品種数が600をこえる図版も残されている。息子Dumasの小説(1848)やVerdiの歌劇(1853)で有名な『椿姫』はこのツバキブームを背景としたものであるが、この頃のツバキの多くは温室植物として扱われ、大衆化したものではなかったために1850年ころを頂点として栽培熱が低下してくると急激に個体数を減少させていったらしい。

サザンカが最初にヨーロッパへ渡ったのは、このツバキブームが過ぎ去ろうという頃である。1869年にフランスで出版された『Illustration Horticole』に最近入ってきたものとして載せられたサザンカがヨーロッパにおける最初の導入記録であるといわれる。次いで1879年にはVeitch商会の依頼を受けたCharles Mariesによって日本から八重咲きの白花と一重咲き紅花の2品種がイギリスに入った。この2品種は1892年12月の王立園芸協会の展示会に出品されて注目を集め、一重咲き紅花のほうは最優秀賞を獲得した。わが国における当時の記録でも“峰の雪”(“富士の峰”と異名同品種)が外国へ渡ったと書かれており、現在もイギリスで“Mine-no-yuki”(図7)が栽培されていることから、一方の八重咲き重弁白花品種は“峰の雪”と思われる。サザンカ品種の発達経過や、その後の欧米における花の好みや育種目標などから考えると一重の紅花よりも“峰の雪”のような八重咲き花が注目されそうに思われるが、受賞したのは一重咲きのほうであった。観賞上の華やかさよりも異国産の原種型として注目されたのかも知れない。これらのサザンカは、その後も植物園などで栽培が続けられたが、園芸植物としては長期にわたりあまり利用されなかった。



図7 Mine-no-Yuki(=富士の峰)

4. アメリカ合衆国へ渡ったサザンカ

20世紀にはいるとアメリカ合衆国において、観賞樹としてのツバキ(主としてヤブツバキの品種)が認識されはじめた。日本から移住した、堂本、清

野、沢田らを中心として日本からの品種の導入や改良、苗木生産のための技術開発がすすめられたため、1940年代後半からアメリカ合衆国を中心とした第二回目の世界的なツバキブームがおこった。

サザンカは1900年代はじめに、輸出入業者などの手で日本からも数品種がアメリカ合衆国へ渡り、またヨーロッパ経由でアメリカ合衆国へ伝わったものもある。1936年から1950年代にかけて沢田は、日本から導入した苗あるいは種子からの実生をもとに新品種の発表をはじめた。またCoolidge Rare Plant Gardenなどから発表された品種も多く、1950年ころまでにはかなりの新品種ができあがっていたらしい。

Humeの著書『Camellias, Kinds and Culture』(1951)にはサザンカ32品種があげられているが、そのうちの約半数はアメリカ合衆国で作出されたものである。当時の新品種は、その後にアメリカ合衆国などで作出されたものに較べれば花形の変異はまだ貧弱で、大部分が一重咲きであり、わずかに半八重咲きが含まれる程度であった。しかし日本から渡った品種としては、その後の華やかな重弁花を作出するために交配親としてしばしば用いられている



図8 Sparkling Burgundy (USA)

“獅子頭”や“昭和の栄”(図4)がすでに載せられており、“東雲”、“七福神”、“雪月花”のような日本の大輪品種も含まれている。これらの中には埼玉県安行の皆川椿花園から直接アメリカ合衆国へ枝を送ったものもあるという。

アメリカ合衆国ではこれ以後現在まで引き続いてサザンカの品種改良がすすめられ、1956年からアメリカツバキ協会にサザンカ実生賞(Ralph S. Peer Sasanqua Seedling Award)が設けられ、作出された優秀新品種に対して賞が与えられている。1970年にカルフォルニアのSunset社から出版された『How to Grow and Use Camellia』の第4版には、サザンカ、カンツバキ、ハルサザンカを含めて78品種が載せられ、このうち48品種はアメリカ合衆国をはじめとする国々で作出さ



図9 Miss Ed (USA)

れたもの(図8、図9)であり、品種数の急激な増加がうかがえる。

5. 南半球へ広がった栽培熱

1950年代からツバキの栽培熱は南半球のオーストラリアやニュージーランドにも広がった。両国の気候は、常緑であるツバキ属植物の生育に適するため他のどの栽培地よりも早く生育するといわれ、種苗生産者のカタログ中にもサザンカの品種が増加している。1952年のWylamの報告では、載せられているのがすべて日本名の品種であったが、その後は“Exquisite”、“Lucinda”(図10)、“Marie Young”、“Plantation Pink”、“Violet Weymouth”などオーストラリアで作出された品種も多くなった。そのうちの一部は日本へも導入・栽培されている。



図10 Lucinda(オーストラリア)

このようにアメリカ合衆国に端を発した2回目のツバキブームは、再び、フランス、ベルギー、イギリス、ドイツ、スペイン、イタリアなどのヨーロッパ諸国から南アフリカにまでも広がっていった。しかし、ツバキ属全体の増殖や利用の中心はアメリカ合衆国に次いで、オーストラリアおよびニュージーランドである。

サザンカの利用はツバキ栽培に伴って進められているが、ツバキに較べると花形の変異に乏しく、やや耐寒性が劣るため、主役は常にヤブツバキ系の品種であり、サザンカはトウツバキとともに重要さにおいては第2位か3位とされる。しかし、近年はツバキ属内での種間雑種作出のための育種親として、カンツバキ群の品種(とくに“獅子頭”や“昭和の榮”)が用いられることも多くなった。その主たる目的は、ツバキ属の花形、花色、樹性の変異を拡大することにあるが、サザンカの秋から冬にかけて開花する性質をヤブツバキやトウツバキなどの派手な花に導入して観賞期間を延長すること、および、サザンカの花の香りを他の種に導入することなどがあげられ、いっぽうではより耐寒性の劣るトウツバキなどとの交雑によってそれらの耐寒性を高めることも考えられている。サザンカを片親とした種間雑種で初期に命名されたのはトウツバキとの雑種であったが、近年ではその他多くの種との間で

交雑が行われ多数の雑種が育成されている。

サザンカの利用面では、秋から冬にかけての花の少ない期間の庭を彩る花木として、あるいは常緑樹として花のない期間でも利用価値がある単植用の庭木としてばかりでなく、日本と同様に生垣としても用いられる。また、匍匐性の強い品種は高木の株元を覆う根締め材料やボーダーとしても利用される。近年は葉や樹形がコンパクトな品種は鉢物としても注目されるなど、品種の特性を生かした利用法が考えられており、さらに一歩進んで、それぞれの利用目的に適した品種の育成が検討されている。

6. 再び中国のサザンカについて

ところで、視点をもう一度中国に戻すが、筆者が杭州市の「花圃」を訪ねたのは1984年2月であるから2回目の中国訪問の途中であった。そのときに園の要請を受けて、スライド写真を中心にして「日本のサザンカ」についての概要を紹介し、いくつかの参考資料を手渡した。話の後で、花の最も少ない冬の花木としてサザンカを利用したいということで熱心な質問を受けた記憶がある。それをきっかけにして、翌年からだと思うが徐碧玉女史からの要請で何回かに分けて、日本からサザンカ品種の苗やさし木のための枝を送った。はじめは検疫のために長期間を要したりしてなかなかうまくゆかず、時には当時の中国からの留学生の帰国の際に持参してもらったこともあったが、2年くらいかかって、結果的には中国人が好む重弁花を中心にしてかなりの数の品種を送った。

その後も徐女史との手紙や資料等のやりとりはしばらく続いたのであったが、筆者も次第に仕事が忙しくなり、時間的、精神的に余裕がなくなったこともあって、連絡の間隔が長くなり、気にしていなかったわけではないのであるが、いつのまにか音信も途絶えた状態が続いた。実はその間に、「花圃」では筆者が送った品種を中心に、さらにアメリカやオーストラリアで栽培されていた品種も加えて、コレクションの充実をはかり、増殖や栽培のための適応試験を実行していたらしい。この間については多少は間接的情報が無かったわけではないが、活着させ、増殖して、さらに普及させるまでには長期間を要することはわかっていたので特別には意識はしていなかった。

それが、昨年末になって久しぶりに徐碧玉女史から連絡があり、「昨年から何回か手紙を出したが戻ってしまうので連絡がとれなかったが、ベトナム経由で新住所がわかった」との但し書き付きで、「20年前のサザンカがようやく中国に根付いた」、「そのために単行本を出版できた」、「できたら様子をみにきてほしい」との連絡が入った。

送られてきた『茶梅』の本は130ページ余りのもので、導入されたり、新たに選抜された品種の写真と解説、サザンカの歴史や栽培法、さらに利用の現状までを紹介したカラーの美しい本で、杭州市の名所・西湖の周囲や公園、品種保存園などに植えられているサザンカの様子がよくわかる。

中国東部の浙江省や福建省は、古くは室町時代から植木などの出入りを含めて日本との交易があり、ヤブツバキ品種にも共通のものが多い。サザンカも浙江省などに数本の古木があるから、栽培が無かったわけではない。

しかし、1980年代のはじめに計画した新たな導入・普及計画を20年以上かけて実現するまでの長い努力と情熱に喝采を送りたい。そして日本で生まれ発達した日本の花であるサザンカが、ヨーロッパ、アメリカ合衆国、オーストラリア、ニュージーランドに、さらに加えて隣国・中国の地にまで棲みかをみつけて根付いたということであるらしい。

今春は花のシーズンが既に終わっているので、つぎの初冬か、その次か、できるだけ早い機会に自身の目で確認に行きたいと考えている。

参考文献

Cherry, B., The Paradise Sasanquas. Intern. Camellia Journ. 29:71-73 (1997)

Cherry, B., The Future of Camellia. Intern. Camellia Journ. 38:48-52 (2006)

Hume, H. H., Camellias, Kinds and Culture. USA (1951)

Intern. Camellia Soc.,The Intern. Camellia Register 1-2 (1993)

Intern. Camellia Soc.,The Intern. Camellia Register Suppl. (1998)

Kaempfel, E., Amoenitatum Exoticarum 5:850 (1712)

北村二郎. 日本の花サザンカ. 農耕と園芸 11 (14):93-96 (1956)

国立歴史民俗博物館編. 冬の華サザンカ. 国立歴史民俗博物館 (2001)

- 日本ツバキ協会編. 現代椿集. 講談社. 東京(1972)
- 日本ツバキ協会編. 現代椿集Ⅱ. 講談社. 東京(1978)
- Sawada, K., The Sawadas and Their Camellia. Amer. Camellia Yearbook 1965:15-21
(1965)
- Sealy, J. R., A Revision of the Genus Camellia. Roy. Hort. Soc., London (1958)
- Siebold, P. F. and J.G. Zuccarini, Flora Japonica 1:158-160 (1835)
- 嘗百園主. 茶梅の一話. 日本園芸会雑誌90:8-11 (1899)
- Sunset Magazine and Book Staff, How to Grow and Use Camellia, ed.4. USA (1970)
- Tate, K., The History of Camellia in Australia. Intern. Camellia Journ. 38:63-69 (2006)
- Tunberg, C. P., Flora Japonica:273-274 (1784)
- Wylam, W. E., Some Australian Camellia-A Preliminary Report. Amer. Camellia Yearbook
1952:9-22 (1952)
- Wylam, W. E., Some New Autumn and Winter Flowering Sasanqua. Amer. Camellia
Yearbook 1956:23 (1956)
- 徐碧玉主編. 茶梅. 浙江科学技術出版. 杭州. 中国 (2007)